短編　〝雪晴れ〟

心の原風景

小川（おがわ）　一（はじめ）

昨夜来降ったドカ雪が、東北山脈おろしの強風にあおられ、この米作地帯は見渡す限り一面ノッペラボーのまっ平だ。どこが道で、どこが田んぼで、どこが用水路なのかが、さっぱりわからない。ただただ一面まっ平らなのだ。空はどんより雪空で重たく鉛色に垂れこめている。おまけに、子供など吹き飛ばしてしまうほどの向かい風だ。

昨夜もあまり良く眠れていない。そのため集団登校からおくれて家を出た。猛吹雪は、通ったばかりのその跡さえも消してしまっている。一人で学校に行かなければならない。この猛吹雪のなかをどうやって学校まで行けばいいのか。普通でも三〇分はかかるというのに。殊に、チビとあだ名のある小四の僕が。

僕は泣くまいとこみ上げてくるのを必死でこらえ、風に向かって一歩、また一歩と、集落外れの一本杉へ向けてのまっすぐな道を歩き始める。

母親はなぜ死んでくれなかったのか。あんなことをやらかした翌日の夕方、勝手に化粧をし、よそゆきの着物に着がえて、何も言わずにコソコソと出ていってしまった。

その夜、おやじは幼い兄妹を呼んで説明してくれた。「お前たちは小っちゃいからわからないかも知れないが、ああゆうことは、夫婦の間では、決して許せないことなんだ。子供を作るための事だから、いつかきっとわかる日が来る」話はそれだけだった。僕たち兄妹はあの母親の子供ではなくなったのだ。僕には何のイメージの湧かない言葉ではあったが、おやじのわずかな言葉の切れはしと、おやじの表情とから、僕は、もはや「お母さん」と呼んではいけない存在になってしまったことをうすうす知れた。「お母さん」と呼べる存在が無くなったことがむなしく、当時、流行っていた田畑義夫の「別れ船」を幾度となく心のなかで繰り返して、お母さんと別れようと必死で努力したものだった。

〈名残りつきない　果てしない
別れ出船の　銅鑼(かね)が鳴る
思い直して　あきらめて
夢は汐路に　すててゆく
（作詞・清水みのる）

なぜ母親は、水呑み百姓のおやじじゃいけないのだろうか。学歴なんて、そんなに大切なものか。勉強って何だ。中ぶらりんで母親らしい顔つきをして振舞っていないで、正式に先生の児とやらを本当に作ればいいではないか。

しかもなぜ、ガラス戸一枚へだてた応接間で、電燈を煌々とつけてまでやらかしたのか。僕ら兄妹は、あの憎むべき母親に、もはや捨てられたのだ。子供心にすればなおのこと、許せるべき存在ではなかったのだ。

こんなことを考えながら、風に吹き飛ばされそうになって、一歩、また一歩と、集落外れの一本杉まで来た。まだ四分の一だ。戦後四年でゴム長などなく、わらであんだ〝ずんべ〟という長ぐつみたいなものを踏いていたのだった。だからもう、足は冷たくて感覚がない。

実はここからが大変なのだ。何の目標物もないし、あたり一面ただまっ白で、何があったかがまるで消し去られている。「いっそのこと、学校へ行くのをやめて、悪い成績でもとって仕返しをしてやろうか」とも思う。母親と先生の仲が良くなった原因のひとつに、僕の成績が良かったからだ。だが足はやはり、西風に逆らって本校へと向かうのだった。

隣近所は勿論のこと、せまい平和な村で、ラジオしかなく、新聞もろくにとっていなかったころのこと、大ニュースが飛び込んできた。「身持ちの悪い女の話し」もう一つは「間男された間抜けな男の話」これらで村は持ちきりだった。そして村中の人達の僕達兄妹を見る目が一変した。戦後引き揚げ者でよそもののくせに、いささか点数が良かった僕は、それをねたむ者たちのいいカモにされた。ある時などは「あの子は不倫をした家の家督だよ」とさも珍しげなものでも見るように、後指をさされた。他人の不幸を見てあざけり笑う気持が人間の心の中にひそんでいるのを、これほど嫌になったことはなかった。近所の小母さんは「ゆうべも、お母さんは帰らなかったのすか？」と、ニタニタと相好を崩して尋

ねて来るのをまのあたりにして、「僕は大きくなったらこの小母さん達をきっと張り倒してやるんだ」と心に決めて無言できつくにらみ返してやったものだった。この時の口惜しさは人生も後期となった今でも忘れない。

こんなことを考えつつ、もう半分道も来たろうか、向かい風は、ますますひどくなる。確かこの辺に、大きな用水堀が流れていて、その橋を渡ると、あとは学校まで一本道だ。しかし、それらしいものは一切見あたらない。あたり一面の大吹雪だ。一本橋がかかっているとおぼしき所を「こん畜生、仕返しをしてやれ」などと、半ばやけっぱちに、あぶなっかし気な足どりでまさぐっていたら、案の定、ズブズブと用水路にはまり込んでしまった。あたりは雪の中、へそから下は冷たい泥の中だ。必死ではい上がり、これまで必死にこらえていたものが一気にせきを切ったようにあふれ出し、大声で「ワッ」と泣き出してしまった。もう行くまいと強風に押されながらトボトボと家へ向かって歩き始めた。

その時である。これまで鉛色にどんより重く曇っていた雪雲の一隅がカッと割れて一條の光が射し込んで来たのだ。これは、〝雪晴れ〟だった。

しかし、それはぜんぜん温かみのない、ギラギラしたニセの輝きを放っている太陽だったのだ。